

2026/3/22「最悪のシナリオ」ヨハネ19：1-7

さ312 交読・詩編22：25-27 せ489 (507)

レント（受難節）の期間も、後半になりました。春分を過ぎて、いよいよ暖かさが日毎に増すこの頃です。イエス様の愛は、身代わりの行為と言い換えることができますが、その犠牲を、今年は「逮捕」「裁判」「処刑（十字架）」と3回にわたって黙想しています。先週は「自ら進んでの犠牲」であったこと。今週は「理不尽な犠牲」であったことを。そして、来週の「唯一無二の犠牲」であったことに繋がっていきます。

理不尽な、身代わり

尊い犠牲、心痛む身代わりにも、二種類があります。それは、賞賛が伴う犠牲、人々に惜しまれつつなされる身代わりと、もう一つは大きな代償にも拘らず、人々からむしろ悪者扱いされ、罰を受けてもしょうがない存在だと顧みられない、いわゆる「スケープゴート」です。荒野に放り出される、生贄の山羊は、宗教的な都合による哀れな犠牲者でした。

人間の社会は、簡単に言えば因果応報です。名誉ある人々は、そこまでおかしなことをするはずはない、裁判に負けた人は色々あるけど、問題があるからそうなったんだと、片付けられます。ですから、そうならないようにと、人は本音と建前を使い分けます。

ところが、イエス様はその紛れもない現実社会の中で、とりわけ理不尽な犠牲者となりました。ご自分の正しさを証明しているにもかかわらず、裁判には負けてしまったのです。古代の裁判だから、不公平だったのだと、片付けるなら、やはりそれは現代社会より劣っていると考える、因果応報に縛られた、単純すぎる感覚と言わざるを得ないでしょう。私たちが、もしもその場所に居合わせたなら、自分がピラトだったら、律法学者だったら、果たして、命懸けでイエス様を勝訴に導くまでに、尽力したでしょうか。

イエス様の身代わりは、敗北感の漂う、一筋の正しさすら塗りつぶすような、哀れな姿でした。私たちは自ら進んで、茨の道を歩まれた、イエス様の跡に従うよう、召されているのです。なんと驚くべき、恐るべきイエス様の決断であり、行動でしょう。

最悪なシナリオを思い描く

感謝会の看板を、清水先生が用意してくださいました。説教題が「最後のシナリオ」と書き換えられていて、笑ってしまいました。あんまりなタイトルだと思われたことでしょう。イエス様の裁判は「最悪のシナリオ」でした。起死回生も、一発逆転も、ありませんでした。私たちの救い主は、人生の「最悪のシナリオ」を知っている方なのです。そして、その台本を、自ら選び、見事にその役割を果たされた方なのです。

人生の最高のシナリオと、最悪のシナリオを、思い描いてみることをお勧めします。丁寧に、もしも本当にそうになったら、今自分が何をやるか？ということも考えてみてください。きっと不思議に、自分のやるべきこと、優先順位が、わかってきます。そして、それは最悪のシナリオを上回る最高を、ひたすら求める生き方が、自分の中に示されることになるでしょう。それは陰しい道のりで、やりたくない、という葛藤との戦いも大きいでしょう。

それを、誰よりも理解し、寄り添い、そして励ましてくださるのは、イエス様なのです。優しいイエス様ですが、それは身代わりとなって、自らを理不尽さと、人々の無責任な結末の尻拭いに、全てを差し出した、本当に、優しいイエス様なのです。

『ばけばけ』の主題歌を聴くたびに、我が家では共感するね、と笑っていました。気のせいじゃない混迷の世の中で、明日はわからないけれど二人で生きる思いが伝わってきます。最悪なシナリオを、イエス様が選ばれたのは、すべての人が、救われるためだったのです。